

【資料紹介】

# 戦前における人生の記憶と植物利用 —東京都台東区谷中の事例—

高野 哲司

総合研究大学院大学 文化科学研究科 地域文化学専攻

- |                          |                              |
|--------------------------|------------------------------|
| 1. はじめに                  | 3.14 アサガオ                    |
| 2. K氏の暮らし                | 3.15 ホオズキ                    |
| 2.1 K氏の紹介                | 3.16 シロヤマブキ                  |
| 2.2 K氏の家の概観              | 3.17 オモト（園芸品種）               |
| 3. 植物にまつわる父、母との思い出       | 3.18 オモト                     |
| 3.1 ヤブコウジ                | 3.19 カントウタンポポ                |
| 3.2 ツバキ                  | 3.20 ユキノシタ                   |
| 3.3 オリヅルラン               | 3.21 カラスウリ                   |
| 3.4 シノブ（K氏は軒しのぶと称する）     | 3.22 タチツボスミレ                 |
| 3.5 ヤマノイモ                | 3.23 オニタビラコ                  |
| 3.6 ムクゲ                  | 3.24 サンショウ                   |
| 3.7 ドクダミ                 | 4. 東京都台東区谷中における戦前の植物利用       |
| 3.8 ヒョウタン                | 5. 考察                        |
| 3.9 ヘチマ                  | 5.1 K氏の家の植物の特徴               |
| 3.10 カニクサ                | 5.2 薬用としての植物利用               |
| 3.11 ハナカイドウ（K氏はカイドウと称する） | 5.3 自宅で食用になる植物を栽培すること<br>の意味 |
| 3.12 オシロイバナ              | 6. おわりに                      |
| 3.13 ナンテン                |                              |

## 1. はじめに

日本における都市住民と植物との関わりに関する先行研究には、岡山県における都市住民の園芸植物の好みとその地域性について論じた報告（小松ほか 2003）、屋敷林における植物の種類および屋敷林の植物利用について木本植物を中心に民俗学的に論じた報告（野本 2006）、花

見と桜について歴史学の視点から論じた報告（白幡 2000）、大阪府における公園管理と花見について論じた報告（増野 2013）などがある。現在、日本の都市部において長屋は老朽化や改築により著しく減少し、長屋に植物が配置されている様子が確認できる場所も少なくなっている。庭の植物は、家の造りの変化に影響を受けやす

いことが指摘されているが（湯浅 2017）、これまでの報告では、谷中地域における建築学的調査（台東区教育委員会 1985）や東京都における下町の緑の実態と効用に関する報告（真鍋 1998）は見られるものの、長屋における植物利用に特化した報告は、ほとんど見られない。

本研究の目的は、東京都台東区谷中の長屋における第二次大戦の前、第二次大戦の後、そして現在に至るまでの植物利用について明らかにすることである。今回、調査地として選定した谷中地域は、関東大震災や第二次大戦での空襲ともに広範囲の焼失を免れており、昔ながらの街並み、特に長屋等が比較的残されている。

筆者は、2017年1月、6月及び2018年1月、3月、5月、6月に6度にわたり東京都台東区谷中を訪問した。このうち2017年1月と2018年1月を除く4度、東京都台東区谷中に残存する二軒長屋に80年以上住んで、幼少期より植物に親しんできたK氏（80代女性）に、幼少期から現在に至るまでの人生の記憶の中における植物利用について、戦前を中心にインタビューを行った。K氏にインタビューを行ったのは、現在の谷中における路地の風景や植物利用について分析するためには、戦前の植物利用についての情報が不可欠だからである。

インタビューは、1回の訪問につき、K氏宅において4時間程度行われた。インタビューの方法は、まずK氏の語りを約2時間程度一通り聞き取り、その内容を筆者がノートに書きとめ、疑問点について質問する形式で行った。

なお、調査時にはK氏が戦前の植物利用に関する話を出して、K氏と筆者で、お互いにディスカッションをする形ですすめた。なおK氏のインタビューについては、録音は行っておらず、ノートの記述をもとに文章化した。

本稿の目的は、K氏（80代女性）による人生の記憶の中における植物利用について戦前を中心にまとめた情報を資料として紹介することである。本稿は、あくまでも1つの事例にすぎない

が、戦前の植物利用に関する稀少な資料として呈示する。

## 2. K氏の暮らし

### 2.1 K氏の紹介

K氏は、1930年に東京都台東区谷中の二軒長屋で生まれた。父親と母親、K氏の3人で暮らしていた。K氏は池之端小学校に通い、1945年に15歳で終戦を迎えた。二軒長屋<sup>1)</sup>は、1912年に建設されたものが現在も残されている。K氏の家は、裏長屋<sup>2)</sup>に属しており、もとは借家であったが、K氏の父が買い取り、現在に至っている。K氏の父がこの家を買収したのは、日当たりが良く、家の裏が寺であり、寺の借景が良いと思ったからである。

K氏は自身の家の建築学的な特徴について次のように話した。

「この家の玄関には、あがりかばちという3段の段があります。私の家の天井には、ガス灯の穴が残されています。この家は、ヒノキ材でできています。夏は涼しく、冬は寒いです。壁は、土壁にベニヤ板を貼っています。廃藩置県のあと、旗本屋敷を解体した際に、出てきたヒノキ材を使って大工がこの家を建てたと父から聞いています。」

K氏の父は1897年生まれで、警察官を務めた。父は、植木を愛好していた。父が植物を愛好していたこともあり、K氏も幼少期から路地の植物や長屋の植物に親しんできた。

K氏の母は、1897年頃の生まれである。K氏は、母との思い出を次のように語る。

「母のつくる炒り卵がおいしかったことを鮮明に覚えています。1ヶ月に一度、お弁当に炒り卵とアミの佃煮、ベニショウガ、ご飯を入れてくれたことが嬉しかったです。床下の収納庫で、糠みそを作っていたことを覚えています。」

K氏はかつて華道の裏千家の山村御流において教授をつとめた。山村御流についてK氏は次のように解説した。

「私は大きなユリは嫌いです。最近では、花粉を取った状態でユリが売られていますが、花粉を取った状態のユリは、ユリとは言えない。私は、華道で山村御流なのですが、華道は自然を生かすためにある。山村御流では、1本しか活かすことはありません。枯草や枯れ木も使われています。贅沢をしないのです。」

また、70歳まで病院のソーシャルワーカーとして勤務し、かつては、大学でも非常勤講師として講義を担当していた。現在でも、教え子から電話がかかってきた際には、丁寧に応じている。約2年前からK氏は緑内障を患い、ホームヘルパーの方々の助けを借りながらネコ5匹とともに一人で暮らしている。

谷中地域における植物利用の中でも、とりわけ戦前の植物利用について詳しく、自宅で栽培していた植物や路地の植物を鮮明に記憶している。K氏は筆者が訪問した際には、いつも次のように話す。

「戦前のことを記憶していて、戦争を体験し、なおかつ80年以上同じ家で暮らしているのは、谷中1丁目では、私だけです。建物自体は古くても、住んでいる人が変わっています。」

この言葉は、K氏自身が、この地域の植物利用について戦前から現在に至るまで定点観測していることを意味し、筆者はK氏に戦前の植物利用について詳細にインタビューを行うことにした。

## 2.2 K氏の家の概観

K氏の家の概観を以下に紹介する。K氏宅は、二階建ての二軒長屋であり、玄関先を中心に様々な植物が見られる。写真1は、K氏宅の南西角である。家の横には、電灯が立っており、ムクゲ、ツバキの鉢植えが配置されている。シロヤマブキ、ミズヒキも地面に生育している。写真2は、K氏宅の南面である。茶色のフェンスがあり、シダ植物のカニクサが生育している。玄関の前には、ドクダミ、オニタビラコなどが生育している。

## 3. 植物にまつわる父、母との思い出

K氏の語りを聴くと必ず出てくるのが、植物にまつわる父そして母との思い出である。K氏の父は、戦前、ヘチマ、カイドウ、オモトなど、多数の植物を長屋で栽培していた。K氏の母は、料理が上手であり、植物の薬用利用に関する知識も豊富であった。

表1にK氏宅の植物利用についてまとめた。表1における植物の記載順は、学名のアルファベット順に基づいている。表1より、K氏宅で利用されてきた植物は、合計45種類である。以下に表1から読み取れることを記述する。

K氏宅で利用されてきた45種類のうち、現存する植物は、13種類であり、K氏の記憶の中の植物<sup>3)</sup>は32種類である。まず、現存する植物を見てゆく。現存する植物13種類のうち、戦前からK氏宅に自生する植物はドクダミとオニタビラコの2種類である。戦後からK氏宅において栽培、あるいは戦後から自生する植物は合計11種類である。戦後から栽培されてきた植物は、ネギなど7種類であり、戦後からK氏宅に自生する植物は、ミズヒキなど4種類である。戦後からK氏宅に自生する植物4種類のうち、在来植物は草本が1種類、木本が1種類、シダ類が1種類であり、帰化植物は1種類である。戦後からK氏宅で栽培されてきた植物7種類は、全て鉢植え（木箱を含む）にして栽培されている。

次に、K氏の記憶の中の植物32種類について見てゆく。記憶の中の植物32種類のうち、戦前に生育が確認されている植物は22種類、戦後に生育が確認されている植物は10種類である。戦前に生育が確認されている植物22種類のうち、自生する植物は5種類、栽培植物は17種類である。戦前からK氏宅に自生する植物5種類のうち、在来植物は草本が4種類であり、木本やシダ類は見られない。帰化植物は1種類である。戦前から栽培されてきた栽培植物17種類のうち、草本は13種類、木本は3種類、シダ類は1種類である。栽培植物17種類のうち、4種類が地植えであり、13

種類が鉢植え（木箱を含む）である。なお、K氏の記憶の中の植物には、自生していたものを鉢植えにした植物2種類が含まれる。

表1より、K氏は自宅の植物を薬用や食用に用いていることが読み取れる。アカジソなど薬味に使う植物については、木箱で栽培したものを収穫して食用に利用していたことが明らかになった。

以下に植物にまつわるK氏の父、母との思い出を24種類の植物を通して紹介する。植物の記載順は学名のアルファベット順に基づいている。

### 3.1 ヤブコウジ

K氏は、盆栽の添え物にしたいと思い、ヤブコウジ（写真7）を入手した。K氏によるとヤブコウジは魔除けに使われるという。

### 3.2 ツバキ

K氏は1972年に家族で伊豆大島に旅行に出かけた。K氏は、伊豆大島でツバキの種子を拾い、自宅に持って帰った。K氏はツバキの種子を3日間水につけてから土に埋めた。ツバキの種子はK氏が播種してから3年後に発芽した。その後、緑の茎が伸び、植物体の高さが30cmから40cmに成長した状態でK氏は初めて伊豆大島のことを思い出し、当該植物が伊豆大島で拾ったツバキ（写真3）であることが分かった。K氏が種子を播いてから20年後に、ある日突然、赤い一重のツバキが咲いた。K氏は、ツバキの木に赤い花が咲いた時に「昭和47年大島」の札<sup>4)</sup>を枝に取り付けた。K氏によると、ツバキは、チャドクガや毛虫が多くつくので、ツバキの鉢植えは、敷地の端に置いているという。その後、ツバキは、K氏が植え替え作業を行っていない状態で、現在に至っている。K氏によると、ツバキの横に出た枝は、切っているのに、花付きが悪くなっているという。ツバキは、花の数は少ないものの、年数が経つにつれて、花自体の大きさが大きくなっている。

なお、ヤブツバキの話をしている際に、K氏から、洗髪する際には「オオシマツバキ」のシャンプー<sup>5)</sup>のみを60年間利用されているという話も聞いた。

### 3.3 オリヅラン

K氏は、1950年代に不忍池で開催された縁日でオリヅランを購入した。K氏がオリヅランを購入したのは、本種の形態が綺麗で、商品名にオリヅランというおめでたい名称がつけられていたためである。

### 3.4 シノブ（K氏は軒しのぶと称する）

戦前は、夏といえば、軒しのぶであった。軒しのぶの下にガラスでできた風鈴をつけていた。戦後もあった。縁日の金魚屋で軒しのぶが売られていた。

木で作った渦巻の土台に、シダ（シダ植物）のシノブを付けたものに、風鈴を付けて、軒しのぶという名称で販売されていた。戦前には、丸い形、船形、宝船、四阿の形、井桁の形など多様な形態の軒しのぶが約10種類売られていた。

軒しのぶは、縁日でK氏の父が買ってきた。軒しのぶは、いつも父が水をやっていたことをK氏は懐古する。父は1950年頃まで、軒しのぶを育てていた。軒しのぶが、乾いてくると下に下ろして水をあげていた。水やりのあとは、じょうろの先で軒に引っ掛けていた。軒しのぶは、根が乾いたら水をやらないといけませんが、水をやりすぎると軒しのぶが腐ると父は言っていた。

軒しのぶといえば、緑がガラスに映るのがよかったという。上はすどうしのガラス、下は曇りのガラス。ヒサシが無い家は、軒しのぶは、ぶら下げられない。軒端をつくるのが、ヒサシであった。ヒサシは、雨避け、霧除けとも言う。軒しのぶは、屋根の先、軒端にぶら下げたのである。軒がなくなると、軒しのぶは、見られなくなる。戦前は、四畳半一間のアパートでも一間の軒があり、切り花や植木鉢の代わりに、軒



しのぶは、アパートの各窓にあった。K氏の家では、軒しのぶは、戦前も戦後も玄関の屋根の端から5cm下がった左の角にあったという。長屋では、軒しのぶに風鈴がついたものを見かけた。廊下に面した屋根のヒサシにもノキシノブはあった。軒しのぶの話から、K氏は浴衣を着て、縁台を出して、線香花火をしたことを思い出した。

### 3.5 ヤマノイモ

2000年頃、K氏宅にヤマノイモが自生していた。K氏は、ヤマノイモの蔓に付くムカゴを採集して、ムカゴ飯にして食べた。K氏は、路地裏に住む人にムカゴ飯を配ったこともある。K氏がヤマノイモのイモを掘ると、イモ自体は直径が2-3cm、長さは15cmであったという。

### 3.6 ムクゲ

K氏は、1970年に隣の町の人からムクゲの枝を1枝頂いたものを挿し木した。その挿し木をした株（写真6）が現存しており、現在も開花している。K氏は、ムクゲの枝に「昭和45年新枝さし」と記した札を取り付けている。

### 3.7 ドクダミ

戦前はK氏の母が民間薬の1つとして、家の前に生育するドクダミ（写真4）を利用していた。具体的には、K氏の母は、家の前のドクダミを干して煎じ薬として利用していた。K氏の母はドクダミの花が咲き終わると、それを切り取り、土瓶で煎じて薬にしていた。ドクダミの葉をおできに貼ると膿だしにもなるのである。ドクダミは体内の毒を消すことから、どくけしの名前で、K氏をはじめとする子どもたちの中でも伝わっていた。

### 3.8 ヒョウタン

K氏の父は、戦前、ヒョウタンを栽培していた。K氏は、父が育てたヒョウタンの実を大切に保

存しており、現在1個が残されている（写真5）。K氏は、最初は2個保存していたが、現存するのは1個である。K氏は、父が育てたヒョウタンの外側に、2000年頃に、ヒョウタンの胴体の部分が寂しそうだと思われたので、そこに不祝儀の菓子の箱に付属していた紫色の紐を取り付けている。K氏自身も戦後、千成ヒョウタンを栽培したが、思うようには育たなかったという。その原因は、ヒョウタンは連作を嫌うことを知らず毎年同じ場所で栽培していたためである。K氏は、ヒョウタンが連作を嫌うことを小学校の大先輩からの話で知ったという。

### 3.9 ヘチマ

K氏の父は、戦前、春になると、ヘチマ2本を植えて、家の2階まで伸ばしていた。ヘチマは、直植えにして、育てていた。夏になるとヘチマの花は見事であり、家の2階のところで、実がなっていた。ヘチマには2つの用途があった。1つめの用途は化粧水である。父がヘチマの蔓の水を採取していた。ヘチマ水は、一晩で青い一升瓶ぐらいの量はとれたという。それで、親子3人で十分間に合ったという。そのため、K氏は、生まれてから今まで、ヘチマ水およびヘチマコロン（後述）以外の化粧品を使ったことがない。2つめの用途は、台所のたわしである。K氏によると、ヘチマは繊維がとれるために、台所のたわし代わりに用いたという。生のヘチマの果実を腐らせると、繊維のみが残るようになり、その繊維を利用して、たわしの代用に使っていたのである。ヘチマを腐らせるのも父の仕事であった。ヘチマは、1950年代まで父が育てていた。しかし、1950年代以降ヘチマは育てていない。父親が年齢的にヘチマを育てることが出来なくなったためである。父がヘチマを育てなくなってから、ヘチマコロンという化粧水が出回るようになった。そのためK氏は、1950年代以降からは、ヘチマコロンを使っているという。

### 3.10 カニクサ

K氏によると、2000年頃から自生しており、毎年、春になると若芽が出てくるという。

### 3.11 ハナカイドウ(K氏はカイドウと称する)

父は玄関に脚の付いた置台をつくり、その上にハナカイドウの盆栽を置いていた。ハナカイドウの盆栽はいわば、玄関の飾りであった。ハナカイドウが植えられた四角い植木鉢は、細長く縁高になっていて二尺はあった。植木鉢の縁高のところが飾りになっていた。春になると花が咲いていた。父はハナカイドウの植木鉢に時々、水やりをしたり、植え替えたりしていた。外に鉢を出したのは、葉に日光をあてるためである。

K氏によると、ハナカイドウの植木鉢は、ハナカイドウが枯れたために、戦争直後になくなってしまったという。

### 3.12 オシロイバナ

K氏によると戦前には、K氏宅をはじめとする谷中1丁目の全ての家にオシロイバナが生育していたという。オシロイバナの花色は赤色や白色であった。K氏は、子どものころ、自宅に生育するオシロイバナの葉や花をままと遊びの材料として用いた。オシロイバナの花を用いて色水も作成した。戦後、オシロイバナは見られなくなった。

### 3.13 ナンテン

戦前、K氏の家には、ナンテンの木があり、鉢植えで栽培されていた。K氏は子どもころ、ナンテンの丸い果実をままと遊びに用いていた。K氏自身はナンテンには難を転ずるという意味が込められていること、厄払いの意味があることは、大人になってから学んだという。戦前は、毎月1日と15日に、母が赤飯を炊いていた。母が炊いた赤飯の上には、ナンテンの葉が載っていた。

赤飯を近所の人から裾分けでもらった時は、いつもお赤飯の上にナンテンの葉が載せてあったという。

### 3.14 アサガオ

K氏の父は、木箱（リンゴ箱、ミカン箱）にアサガオの種子をまいて、竹の棒に蔓を伸ばしていた。素人には、格子に竹を組んでつくる行燈づくりは難しい。何本か植えないと行燈にはならないのである。K氏はアサガオの思い出について次のように語った。

「アサガオは、幼児期にはあった。苗は買わなかった。アサガオは葉をもんで、虫に刺されたときのかゆみ止めに使いました。蔓の下の方の葉は、虫さされに使うのでなくなっていく。蔓についている葉を採って、葉をもんで、かゆいところに、こする。葉をもんでこすると白い液が出ました。アサガオの葉が1枚で足らなければ、2枚使いました。秋になって蔓をおろす頃、蔓の下の方の葉は既に使われていて有りませんでした。秋になって蔓を下す作業も父が担っていました。アサガオは、植木鉢に植えられ花が咲いた状態のものを池之端の夜店で、父が買ってきました。紫色、赤色、空色の3種類のアサガオが1つの植木鉢の中に植えられた状態で売られていました。アサガオは、朝、父が水やりするので、日当たりのよい外に置いていました。一重のアサガオでした。父が育てたアサガオの中でも紫色の花が増えた。父は夜店で買ったアサガオの鉢植えを花が咲き終わった後も、種子ができるまで大切に栽培し、種子を次の年の為にとっていました。」

### 3.15 ホオズキ

ホオズキの事例もK氏と父との関係を語るうえでかかすことができない。K氏はホオズキの事例について以下のように話した。

「戦前、父がホオズキも育てていました。リンゴ箱にホオズキを1本から2本植えていました。」

そのリンゴ箱には、ホオズキだけでなく、アカジソも一緒に植わっていました。今でいう、寄せ植えです。場所が無いので、いくつかの種類を1つのリンゴ箱の中で育てていました。慎ましい暮らしでした。戦前は、植木鉢よりもミカン箱やリンゴ箱が一般的でした。戦後、1950年から1960年になると植木鉢が出てきました。戦前は、リンゴも卵と同じように靱殻に詰めて箱に入って売られていました。今、木箱の文化はなくなってしまいました。ホオズキは、浅草の観音様と関係があり、お盆の時の飾り物です。八百屋でもホオズキは売られていました。楊枝で実をつまんで中から種子を出して、実をふくらませて、音を出しました。」

### 3.16 シロヤマブキ

2000年頃に、地面に芽生えてきた。葉や茎はヤマブキ（バラ科）に似ているが、花の色が白色であることが特徴である。K氏は、鳥がシロヤマブキの種子を運んできたと推察している。シロヤマブキは、見かけることが珍しいので、そのままの状態で置かれている。

### 3.17 オモト（園芸品種）

2008年頃、K氏は植木屋に頼んでオモト（園芸品種）を購入した。植木屋に注文してから購入までには時間を要し、1株あたり2千円から3千円の値段であったという。

### 3.18 オモト

オモトは、お祝いの時の贈り物であった。引っ越しの時には、オモトを一晩おいてその後、人が入った。これは、厄払いのためである。親が子どものためにオモトを置くこともあった。K氏が子どものころからオモトはあった。

K氏はオモトについて、次のように話す。

「オモトは父が育てていました。子どもの頃、オモトに赤い実がついていたことを覚えています。それほどオモトは身近にありました。戦時中、

父が育てていたのは、緑の濃いオモトです。父は1年に1度、オモトの土だけ替えていました。父は、てぬぐいをしながら、10分程度、作業していました。玄関の外に置いていました。父の育てていたオモトは戦後50年生きました。1980年代になっても、オモトは時に、赤い実をつけていた。」

### 3.19 カントウタンポポ

K氏によると、戦前は、どの家も皆、玄関は日本タンポポ（カントウタンポポが該当）が多く生育しており、カントウタンポポを踏まないと家を出られない状況であったという。K氏からは、幼少期、カントウタンポポの花や葉をままごと遊びの材料に用いていたという話を聞いた。

### 3.20 ユキノシタ

K氏は、ユキノシタについて鮮明に記憶している。K氏によると、ユキノシタは戦前から地面に生育しており、白い花がきれいに咲いていたが、戦後いつの間にか消えたという。

### 3.21 カラスウリ

戦後、自然に地面に生えてきた。K氏によると、カラスウリの蔓には、赤い実がなっていたという。K氏宅のカラスウリは、近所の人との会話のきっかけにもなった。ただし、芽生えてきてから10年も経たない間に消えてしまった。現在は、2階に、本種の枯れた蔓のみが残っている。

### 3.22 タチツボスミレ

タチツボスミレの事例はK氏と父との関係を語るうえでかかすことができない。K氏はタチツボスミレについて以下のように話した。

「戦前、春に、父が小さな日本スミレ（タチツボスミレ）を植えていました。縁日の露天商でタチツボスミレの苗を買ってきていました。父は、リンゴ箱の端のほうに、タチツボスミレを植えていました。タチツボスミレは、縁日で買っ

てくるだけでなく、溝のところに生えているものも植えていました。戦前は、ドブの縁の土をいれていました。ドブの縁だから、土がゆるい。どこの家のものでもないし、お金もかからない。」

### 3.23 オニタビラコ

オニタビラコ（写真8）は戦前からK氏宅に生育している草本植物である。K氏は、子どものころ、この植物の花をままごと遊びに用いていた。氏宅の玄関先に生育している。K氏はオニタビラコを小さな黄色い菊と呼んでいる。戦前から生育が確認されており現在に至っている。

### 3.24 サンショウ

戦前から1950年代までは、K氏宅にもサンショウの木があった。

K氏は、サンショウの利用について次のように話す。

「戦前、我が家には木箱に植えられたサンショウの木が1本だけありました。サンショウは棘があるので、当時、子どもであった私はサンショウを触りませんでした。父がサンショウを栽培し、母はサンショウの葉を料理に使っていました。母は、サンショウの葉をたたいて香りを出し、薬味として料理に使っていました。サンショウの木の高さは、60cmが限度でした。サンショウの木は虫がつきやすく、長期間の栽培が難しいです。父は、サンショウを木箱に植えてから3年を目安に、株を植えなおしていました。サンショウの木は、どの家にもありました。」

## 4. 東京都台東区谷中における戦前の植物利用

戦前、水やりなど長屋における植物の栽培管理は、外仕事として位置づけられており、その家の主人が担っていたことが明らかになった。主人が栽培したシソなどの野菜を調理するのは、妻の仕事であったことも明らかになった。戦前の長屋では、八百屋で入手したリング箱やミカ

ン箱といった木箱を植木鉢の代用品として用いていたという情報が得られた。土は、ドブの縁のところから採取して、木箱の中に入れ、土の入った木箱で植物を栽培していたという情報が得られた。K氏の人生の中における植物にまつわる記憶としては、父親がドブに生育するタチツボスミレを採集し、採集したタチツボスミレをリング箱で栽培している様子、父親が軒しのぶ（シノブが該当）の水やりをしている様子などがあげられた。

戦前は、料理の際に薬味として用いるサンショウは店頭で販売されていなかったため、サンショウの木はどの家でも栽培されていたという事実も明らかになった。サンショウを植える場合でも、アオジソなど数種類の植物を同じ木箱の中に一緒に植えていたという情報が得られた。K氏の話聞いた後で、現在の谷中における植物栽培の手法について調べてみたところ、1鉢の植木鉢に数種類の植物が栽培されている事例が確認された。戦前の長屋で行われていた木箱を活用した植物の栽培は、現在の植物栽培手法の1つ、寄せ植えの原点であることが示唆された。

## 5. 考察

### 5.1 K氏の家の植物の特徴

本研究の目的は、東京都台東区谷中の長屋における第二次世界大戦前を中心とした植物利用について明らかにすることであった。K氏宅で利用されてきた45種類の植物のうち、現存する植物は、13種類であり、記憶の中の植物<sup>5)</sup>は32種類であった。ここでは、K氏宅において、戦前に見られた植物および戦後に確認された植物について、その特徴を紹介する。また、戦前に見られた植物が戦後に見られなくなった理由について、3.20.で紹介したカントウタンポポを例にあげて考察を行う。

戦前に見られた植物の特徴としては、常緑で耐陰性があり、植物体が縦に大きくならず、広がらず、施肥などの手間がかからないことがあ



げられる。在来植物のアオキ、ヤツデはこれらの特徴を有している。

一方、戦後に見られた植物の特徴としては、施肥などの手入れが必要であることがあげられる。

K氏が住む長屋の路地では、1940年頃から各家庭の主人により、炭ガラを石畳や土の道に敷き詰める作業が行われた。この作業が繰り返されるようになってからは、徐々にカントウタンポポの個体数は減少した。本種は1950年代までは生育が確認されていたが、かろうじてドブの縁に残っている状況であった。1960年代以降になると、路地の舗装（水道管工事およびガス管工事を含む）によりカントウタンポポの生育は確認されなくなった。これらのことから、戦前に見られた植物が戦後に見られなくなった原因として、路地の舗装が関与していることが示唆された。

## 5.2 薬用としての植物利用

薬用としての植物利用については、父が育てたアサガオの葉が虫刺されに利用される事例、家の前に生えているドクダミを煎じて薬に使われた事例がみられた。このことは、K氏の「お医者さんにかかるのは、よほどの時でした。私の家も含めて、富山の薬売りが売りに来る富山の薬がどこの家にも置いてありました。」という言葉と関係があるように思われる。

K氏によると、戦前、母は植木を置いている場所からミミズが出てくると移植ごてで、ミミズを取り、土用の暑い日に3日間、物干し場に干していたという。3日間、乾燥させるとミミズはスルメのようになるという。干したミミズを薬として保存しておき、冬に風邪をひいたときに、土瓶で煎じて、熱さましとして飲んだという。このようなことを踏まえると戦前は大都市においても、ドクダミなど自然に芽生えている植物も薬用に利用し、居住者同士で、植物の薬用利用に関する知識を共有していたと考えられる。

## 5.3 自宅で食用になる植物を栽培することの意味

戦前、K氏宅において利用されてきた植物には、サンショウやアカジソ、アオジソがあげられるが、これらの植物は、リンゴ箱やミカン箱といった木箱に植栽されていた。K氏は「戦前は、食生活につながるものから植えてきた。とりわけ薬味に使われる植物は、店頭では販売されていないため、自給自足で賄った。すなわち自分の家であるもので間に合わせた。」と話した。

一方、現在では、大都市においてキウイフルーツやゼンマイ、ワラビなどの食用になる種類の植物が庭に植栽されることが増えている（池谷2013）。現在は、サンショウやアカジソ、アオジソなどの薬味はスーパーで販売されているため、手軽に購入することが可能である。キウイフルーツなどの果物やワラビなどの山菜類も、サンショウをはじめとする薬味と同様に店頭で販売されており、購入することが可能になっている。現在とK氏が幼少期を過ごした戦前とは、植物の流通や栽培に関する事情は、全く異なっているものの、現在において自分の家で食用に供する植物を栽培し、収穫するという事象はどのように考えてゆけばよいのだろうか。

K氏は「戦前は、とりわけ薬味は自分の家にあるものでもって、間に合わせた。また現在のように段ボールや発泡スチロールなどはありませんでしたので、贈り物や輸送の際には、木箱を使う文化もありました。戦前と現在では植物に対する感覚自体も変化しています」と繰り返し話した。このK氏の言葉の意味を現在における植物利用の観点から分析するためには、戦前の谷中地域をはじめとする日本人の暮らしや社会情勢がどのようなものであったのかということ捉える必要があり、この点については、今後の研究の課題である。

## 6. おわりに

以上、東京都台東区谷中に80年以上住んでい

るK氏（80代女性）の植物利用の事例を資料として紹介した。

K氏の語りから、戦前の谷中地域における植物利用の一端が明らかになった。また、戦前は、植物の栽培管理は、その家の主人が担っていたことも明らかになった。タチツボスミレの事例、軒しのぶの事例から親と子ども（K氏）との関係性も知ることができた。現在では、戦前のことを知る方々は高齢になり、植物利用に関するインタビューが可能な人も非常に少ないように思われる。

長屋における植物の種類や利用方法については、第二次大戦前と第二次大戦後では変化があるように思われる。具体的には、K氏宅ではドクダミやオニタビラコのように戦前からの植物も一部は現存しているが、大部分の植物は見られなくなった。これは、長屋における植物利用は社会環境にも影響を受けていることを意味しているのではないだろうか。聞き取り調査を続けながら第二次大戦前および1970年代の高度経済成長期の社会環境について捉えることが研究課題である。

本稿はK氏にインタビューを行った結果の一部を短文にまとめたものにすぎないが、戦後70年以上が経過した現在では、戦前の植物利用に関する知見は大変貴重な資料であると筆者は考えている。

## 謝辞

本稿を執筆するにあたり、東京都台東区谷中にお住いのK氏には戦前の植物利用に関する大変貴重な情報を提供していただきました。また、池谷和信先生には東京都台東区谷中におけるフィールドワークを支援していただくとともに本稿に関する貴重なご助言をいただきました。記して感謝いたします。

## 注

- 1) 二軒長屋とは、長いひと棟の家を2つに仕切って2世帯が住めるようにした住居を意味する（公益財団法人台東区芸術文化財団 台東区立下町風俗資料館 2015）。
- 2) 長屋には、表長屋と裏長屋がある。表通りに面して建てられている長屋を表長屋と呼ぶ。表長屋に対して、その裏手にある長屋を裏長屋と呼ぶ（公益財団法人台東区芸術文化財団 台東区立下町風俗資料館 2015）。
- 3) K氏の人生の記憶の中にある植物であり、現存しない。
- 4) K氏は、1972年に伊豆大島で拾った種子に由来するツバキであることを忘れないようにするために、和暦で「昭和47年 大島」と記した札をツバキの枝に結んだ。
- 5) 伊豆大島で採集されたツバキの種子から生成された市販のシャンプーを指す。

## 参考文献

池谷和信

- 2013 「生き物文化の地理学の誕生 生き物資源利用と管理の思想」池谷和信編『ネイチャー・アンド・ソサエティ研究 第2巻 生き物文化の地理学』349-367、海青社。

小松 冨・守田益宗

- 2003 「岡山県における都市住民の園芸植物の好みとその地域性」『岡山理科大学自然植物園研究報告』8: 23-29。

公益財団法人台東区芸術文化財団 台東区立下町風俗資料館

- 2015 『台東区立下町風俗資料館 図録』

真鍋千恵子

- 1998 「下町の緑の実態と効用 事例報告7：下町の緑 下町の緑の実態と効用～街と人とを緑がつなぐ」『ランドスケープ研究』62(1): 42-44。

増野高司

- 2013 「生き物文化の地理学の誕生 生き物資源利用と管理の思想」池谷和信編『ネイチャー・アンド・ソサエティ研究 第2巻 生き物文化の地理学』325-348、海青社。

仁田坂英二

- 2009 「古典園芸植物のドメスティケーション」山本紀夫編『ドメスティケーション』



ン—その民族生物学的研究』国立民族学博物館調査報告84: 409–443。

野本寛一

2006 「屋敷林の民俗—宮城県のイグネを緒として」『民俗文化』18: 11–75。

白幡洋三郎

2000 『花見と桜—「日本的なるもの」再考』PHP研究所。

台東区教育委員会

1985 『台東区文化財報告書第三集 谷中のす

まい』

寺崎留吉・奥山春季

1977 『寺崎日本植物図譜』平凡社。

湯浅浩史

2017 『日本人なら知っておきたい四季の植物』ちくま新書。

(2018年12月6日 採択決定)

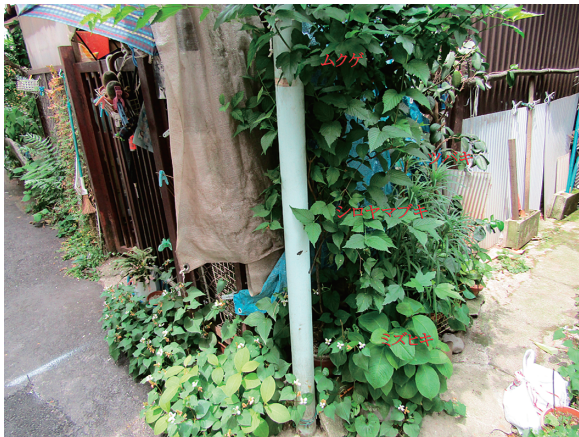


写真1 K氏宅の概観1.  
(2017年6月)



写真3 K氏宅のツバキ  
(2018年3月)



写真2 K氏宅の概観2.  
(2017年6月)



写真4 K氏宅のドクダミ  
(2017年6月)





写真5 K氏宅で戦前に父が栽培していたヒョウタン  
(2018年5月)



写真7 K氏宅のヤブコウジ  
(2017年6月)



写真6 K氏宅のムクゲ  
(2018年3月)



写真8 K氏宅の玄関先に生育するオニタビラコ  
の花  
(2017年6月)



表 1 K 氏宅における植物利用

植物名	学名	大分類 <sup>1)</sup>	科	現存 <sup>2)</sup>	過去 <sup>3)</sup>		栽培 <sup>4)</sup>		自生	栽培植物	野生植物		有用性	備考
					戦前	戦後	鉢植え	地植え			帰化植物	在来植物		
ネギ	<i>Allium fistulosum</i>	草本双子葉	ユリ			○	○			○			食用	
ミズヒキ	<i>Antennaria filiforme</i>	草本双子葉	タデ	○		○			○		○		鑑賞	
ヤブコウジ	<i>Ardisia japonica</i>	木本	ヤブコウジ	○		○	○			○			儀礼	本文3.1を参照
アオキ	<i>Aucuba japonica</i>	木本	ミズキ		○			○		○			鑑賞	
コパンソウ	<i>Briza maxima</i>	草本双子葉	イネ			○	○			○			鑑賞	
ハボタン	<i>Brassica oleracea</i> var. <i>acephala</i>	草本双子葉	キク		○		○			○			鑑賞	
ツバキ	<i>Camellia japonica</i>	木本	ツバキ	○		○	○			○			鑑賞	本文3.2を参照
オリヅルラン	<i>Chlorophytum comosum</i>	草本双子葉	ユリ			○	○			○			鑑賞	本文3.3を参照
キク	<i>Chrysanthemum morifolium</i>	草本双子葉	キク		○		○			○			鑑賞	
ミツバ	<i>Cryptotaenia japonica</i>	草本双子葉	セリ			○	○			○				
シノブ	<i>Davallia mariesii</i>	シダ類	シノブ		○		○			○			鑑賞	本文3.4を参照
ヤマノイモ	<i>Dioscorea japonica</i>	草本双子葉	ヤマノイモ			○			○	○	○		食用	本文3.5を参照
ヤツデ	<i>Fatsia japonica</i>	木本	ウコギ		○			○		○			鑑賞	
ムクゲ	<i>Hibiscus syriacus</i>	木本	アオイ	○		○	○			○			鑑賞	本文3.6を参照
ドクダミ	<i>Houttuynia cordata</i>	草本双子葉	ドクダミ	○	○				○		○		薬用	本文3.7を参照
ホウセンカ	<i>Impatiens balsamina</i>	草本双子葉	ツリフネソウ		○		○			○			鑑賞/遊び	
ヒヨウタン	<i>Lagenaria siceraria</i>	草本双子葉	ウリ		○			○		○			鑑賞	本文3.8を参照
タカサゴユリ	<i>Lilium formosanum</i>	草本双子葉	ユリ	○		○			○		○		鑑賞	
ヘチマ	<i>Luffa cylindrica</i>	草本双子葉	ウリ		○			○		○			薬用	本文3.9を参照
カニクサ	<i>Lygodium japonicum</i>	シダ類	フサシダ	○		○			○			○	鑑賞	本文3.10を参照
ハナカイドウ	<i>Malus micromalus</i>	木本	バラ		○		○			○			鑑賞	本文3.11を参照
マミラリア属の一種	<i>Mamillaria</i> sp.1	サボテン類	サボテン	○		○	○			○			鑑賞	
マミラリア属の一種	<i>Mamillaria</i> sp.2	サボテン類	サボテン	○		○	○			○			鑑賞	
オシロイバナ	<i>Mirabilis jalapa</i>	草本双子葉	オシロイバナ		○				○		○		鑑賞/遊び	本文3.12を参照

